

ネパール・カトマンズにおける シングルマザーとの邂逅をめぐって

川口千尋*

カトマンズに生きる女性たちの語りを求めてフィールドワークを始めて1週間が経ったある日、ボランティア先の学校¹⁾での朝礼や授業を終えると、同行していた地域のNGOの代表を務める女性が次のようなことを尋ねてきた。

「これから身寄りのない老人の介護をしている知り合いのNGOを訪ねて、そこで働いている女性の話を聞いてみない？あなたはいろんな女性たちの人生について聞きたいって言っていたでしょう。」

筆者は午前の授業を終えて少し疲れていたが、またとない機会に嬉々とした表情を浮かべて彼女についていった。



写真1 介護施設の建物

到着したのはコンクリート造の3階建ての建物だった。その日のカトマンズは朝から厚い雲が空を覆う雨季らしい天気だったが、午後には太陽の強い光が差し込んできて気温が急激に上昇し、建物の中に熱がこもっていた。外を眺めたりベッドに横たわったりして自由に過ごす老人たちの近くで、少し汗ばんだ数人の女性たちが談笑しており、笑顔で私を迎えてくれた。この人たちが団体の職員の女性たちである。廊下の奥には生まれたばかりの赤ん坊を抱いた若い女性がおおり、少し警戒したような表情で私のことを見つめていた。筆者は彼女の強い視線にたじろいで、すぐにその場から立ち去ってしまった。

さまざまな境遇の女性や老人が住まう場

筆者が急遽訪ねることになったこの団体は、2003年に地域の女性によって設立された小規模なNGOであった。同団体が運営する施設では、身寄りのない老人や家庭内暴力の被害に遭った女性、未婚での妊娠・出産を経験して村八分になったシングルマザーなどが共同生活を送っていた。身寄りのない老人

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 筆者は2019年の夏、ネパールの学校で演劇や芸術の授業を行なうボランティアをしていた。

や女性の衣食住はもちろんのこと、シングルマザーの子どもたちの学費も同団体が工面している。ネパール語のみで活動内容を発信しているため、²⁾外国の支援者と繋がることができず、資金繰りが厳しい状態であるという。

本稿では、この団体の職員の女性の中でも、「シングルマザー」であるという共通点をもつふたりのライフ・ヒストリーに触れながら、女性たちにとってこの団体がどのような存在なのか明らかにしていきたい。また、ふたりの語りをとおしてネパールにおいてシングルマザーとして生きるということの意味をうかがい知ることができるだろう。

マヤさんのライフ・ヒストリー

1人目の女性は、代表の秘書として働くマヤさん（仮名）である。現在36歳で19歳と16歳の息子がいる。彼女はカトマンズの東側にあるカブレパランチョーク郡出身で、両親は農業を営んでいた。インドとの国境に近い南部のチトワンに引っ越してからは、米

などを作っていたという。実家について話していた彼女は、学校のことについて質問が及ぶと、その表情を曇らせた。

「私は公立学校に通っていましたが、でも15歳までです。私は嫌だったのですが、家族が私を結婚させました。」

彼女の夫は同郷の人であったため、家族が住むチトワンからカブレパランチョーク郡に戻ることになったという。結婚から7カ月が経った頃、マヤさんは夫とともにカトマンズに引っ越し、小さな商店を始めた。

移住労働の機会と豹変した夫

「結婚の1年後に長男を出産しました。3年後には次男を産みました。2人目の子どもが生まれた頃から、夫との関係が悪くなり始めたので、私は家族のもとを離れて国外で働こうと思うようになりました。」

ネパールは1990年の民主化以降、多くの移住労働者の送り出し国となってきた。国内総生産の32%は移住労働者による送金に支えられており、女性による送金もそのうち11%を占めている [World Bank 2016]。マヤさんもイスラエルの介護施設で働きながら家族に送金をしていたという。不在の間は実母に子育てを任せ、夫が手伝うという約束だった。しかし、しばらくして彼女が送金したお金を夫が浪費しており、さらには浮気もしているという連絡が入ったため、彼女は稼いだお金の送金先を実家に変更した。



図1 ネパールの地図

2) 代表、副代表をはじめとした職員の女性たちは英語を用いて情報発信をすることができないため、Facebook 上でのネパール語による情報発信によってネパール国内のドナーを獲得しようと画策していた。

「夫は私の収入を得られなくなったことに憤慨して、前のようにお金を送らなければ息子を殺すと何度も何度も脅しの電話をかけてきました。」

帰国と離婚，そして現在の仕事との出会い

5年間の移住労働を経て帰国した彼女は、帰国後半年の間必死に働いて離婚のための資金を貯めたという。マヤさんは彼女自身のように仕事をもつ独立した女性でも、シングルマザーになるという決断には勇気がいると話していた。金銭的に可能だとしても、ネパール社会の家父長制のもとでは「父のいない子ども」という存在は厳しい立場に置かれるためである。³⁾

それでも離婚を決断した彼女は、2015年のネパール地震発生時にイスラエルの支援団体の通訳をしたことがきっかけとなり、現在のような福祉団体における仕事に携わり始めたという。その後、彼女は化粧品販売のビジネスも始め、ひとりで家計を支えてきた。長男はオーストリアの大学に進学し、次男も地元の高校に通って勉学に励んでいるようだ。

リタさんのライフ・ヒストリー

2人目のリタさん（仮名）は現在34歳で、同団体において調理や老人たちの介護を担当している。彼女はオフィスの奥にあるソファに腰掛け、最近幼稚園に通い始めたばかりの息子をあやしていた。



写真2 リタさんが働く調理場

リタさんはカトマンズの北東に位置するシンドゥパルチョーク郡出身で、農業をしていた両親と姉、弟と一緒に学童期を過ごした。しかし、彼女が14歳の頃、母の病気の治療のために家族全員でカトマンズに引っ越すことになったという。

最初の結婚と再婚相手の暴力

父と姉が働いていたため、彼女と弟は学校に通い続けることができたが、経済的には厳しい状況が続いた。そこで家庭の負担を減らすためにリタさんが結婚することになったのだという。結婚相手は猜疑心が強い人で、彼女が少しでも他の男性と話すと浮気を疑ってくるような人だった。子どもがいなかったということもあり、彼女はその夫と別れることができたが、次に紹介されたヘタウダに住む新しい夫からは暴力を振るわれた。そのことを義母に相談すると、義母もリタさんのことを叩くようになったという。4～5ヵ月経つ

3) 田中 [2017: 108-117] も、夫からドメスティック・バイオレンスを受けて離婚を望んでいた収入のある女性が、周囲から「子どものためにも離婚すべきではない」、「夫の名誉が傷つく」、「世間体を失う」などといった批判を受けたという事例を挙げている。

たのちリタさんが息子を身籠ると、もう自分のもとから去ることはないと思ったのか、夫の暴力はさらにエスカレートしていった。

息子が生まれた後に、リタさんはカトマンズで働くと言い出した夫についてまた引っ越しをすることになった。カトマンズへ移った後、夫は近くに住んでいた彼女の家族にお金を無心するようになったという。彼女が野菜の売り子をして稼いだ少ないお金も寝ている間に全て夫に盗られてしまった。

息子との離別と思いがけない懐妊

そうした厳しい生活を見兼ねた実父が、彼女の離婚に手を貸したが、まだ幼かった息子は夫の家族に引き渡さなければならなかった。彼女はその後、もう一度再婚したが、新しい結婚相手の家族は彼女を家事労働者やホテルの従業員として働かせて搾取したため、相手の家族の目を盗んでカトマンズに逃げてきたという。

カトマンズに戻った彼女はバスターミナルの近くにあるゲストハウスの仕事を見つけ



写真3 バスターミナルの近くの風景

た。住み込みの仕事だったが、その住居と労働環境は劣悪だったという。ある夜、ナイト・クラブ帰りと思しき酔った男性客がやってきた。

「私はチェックインの手続きを始めようと思いましたが、彼の様子は普通の客と違っていました。その男は、妻を亡くしたという身の上話を始めました。彼は私の手を握って『君はきれいだ』と言いました。その時は私以外に従業員はおらず、誰かを呼んで助けを求めすることもできませんでした。そのままその男は、受付のカウンターの横で、私をレイプしました。」

彼女はそのような環境では働けないと思い、新たなゲストハウスでの仕事を見つけた。ここでは「ディディ」⁴⁾と呼べるような良い友人にも会うことができ、少しは落ち着けるはずだった。しかし、その頃に妊娠が発覚したのだという。中絶手術の費用が払えなかった彼女はその子を産むことにした。ディディが寄る辺のない妊娠中の彼女を現在働いている団体に紹介し、彼女は子育てをしながら介護の仕事に携わるようになった。

ふたりのシングルマザーの語りから

最初に紹介したマヤさんは、仕事以外の自己実現の一環として介護の仕事をしている一方で、リタさんにとってこの団体は生活の場となっている。リタさんのように性暴力を受けた女性などは、家族の *izzat*（社会での価値／名誉）を傷付ける存在であるとして親族

4) ネパール語で姉を意味する。年上の親しい女性や従姉妹などを呼ぶ時にも用いられる。

や所属していたコミュニティから排除されてしまう [Poudel 2011]。実際に彼女も「父親の分からない子ども」を連れて家族のもとに帰るのはむづかしいという。

2021年6月、ネパール政府は市民権法を改正し、父親を特定できないシングルマザーの子どもにも市民権を付与することを決定したが、⁵⁾市民権の取得には地方自治体が発行する出生証明書が必要となる。父親が特定できない子どもの出生証明書を発行する場合には地域の人による推薦状の提出が義務付けられているが、未婚の母に対する偏見があるため、推薦状を作成する人は少ないのではないかと指摘されている [South Asia Monitor 2021]。

筆者はこうしたニュースを耳にするたび、必ず冒頭に記した強い視線の彼女のことを思い出す。彼女は調査当時20歳だった筆者と同年であり、筆者が施設を訪れる数日前に保護されたシングルマザーだった。当時、今よりもさらに不勉強であった筆者は、名も知

らぬ彼女のことをただ気の毒に思うことしかできなかった。今度は同い年の友人として、もしくは協働できる同胞として、彼女と「出合い直す」ことができるだろうか。いつか彼女のような女性の生きざまを、共鳴できる姉——すなわち「ディディ」のストーリーとして日本の若い女性に紹介できるように研究を続けたい。

引用文献

- Poudel, Meena. 2011. *Dealing with Hidden Issues: Social Rejection Experienced by Trafficked Women in Nepal*. PhD dissertation, Newcastle University, UK.
- South Asia Monitor. 2021. <<https://www.southasiamonitor.org/nepal/children-single-mothers-nepal-might-still-face-problems-getting-citizenship>> (2021年11月29日)
- World Bank. 2016. *Migration and Remittances Factbook 2016*. Advanced Edition 3rd ed. World Bank Group.
- 田中雅子. 2017. 『ネパールの人身売買サバイバーの当事者団体から学ぶ一家族、社会からの排除を越えて』上智大学出版.

5) 同改正法が適切に施行された場合、約68万人の子どもたちがネパールの市民権を得ることになるという [South Asia Monitor 2021].